

ロマンスの修辞学（アベラールとエロイーズ）

吉澤 稔男
よしざわ としお

パリ東部の二〇区。地下鉄二番線ペール・ラシエーズ駅から徒歩一分ほどのところに広大な墓地がある。これがペール・ラシエーズ墓地。エディット・ピアフ、シヨパン、バルザック、ビゼー、ブルースト等、

多くの著名人の墓があることで知られている墓地だ。アベラールとエロイーズの墓もこの墓地内にある。両者の遺骸が合葬された、所謂比翼塚である。

ヨーロッパの文学に多少なりとも親しんだことのある方ならば、アベラールとエロイーズの名前くらいはお聞き及びのことと思う。彼らをひたむきな愛に生き、中世のラヴ・ロマンスの主人公として記憶されている方もおられるに違いない。

かくいう私自身も、高校生の頃耽溺し

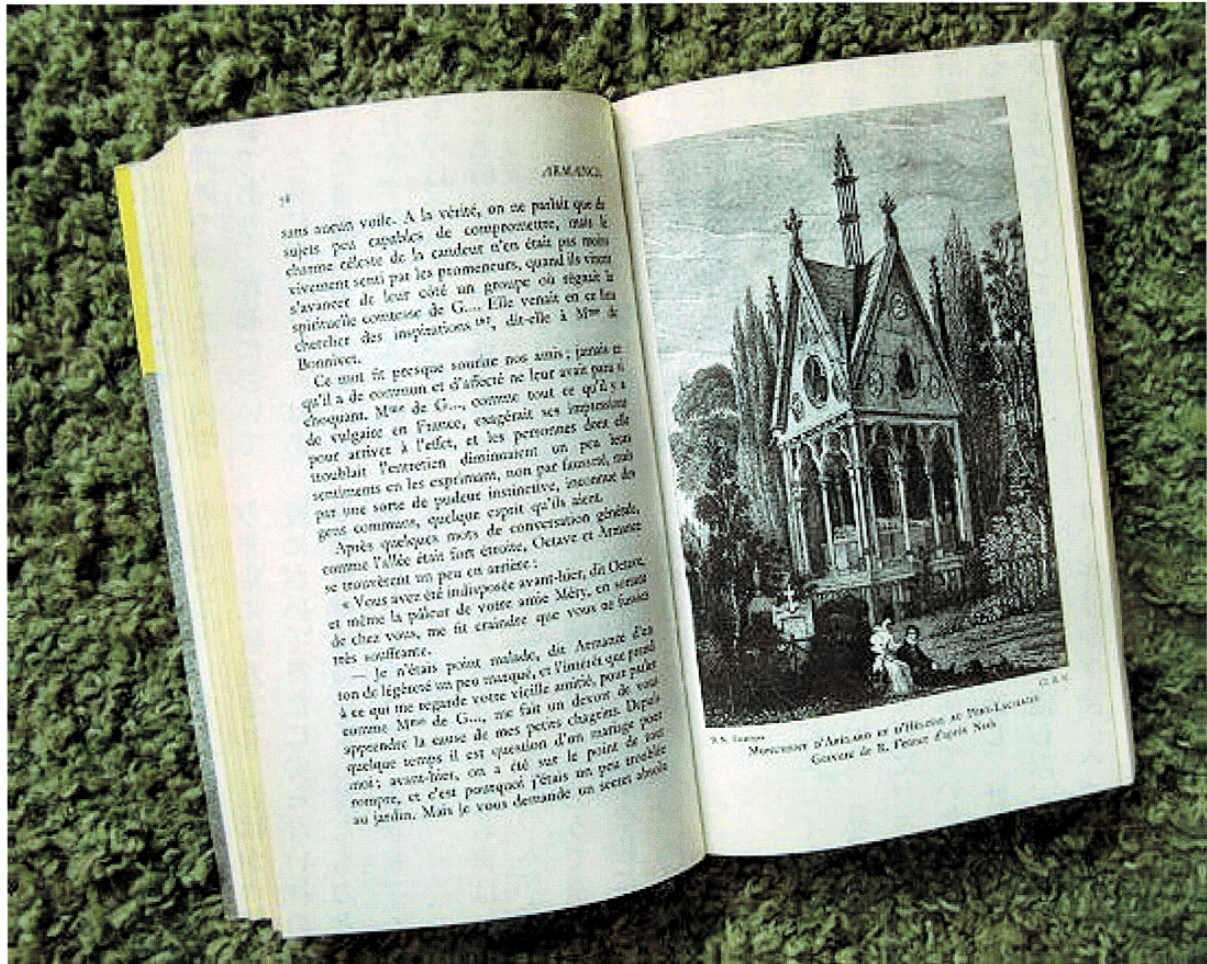
ていた堀辰雄の世界を通じて彼らの存在を知った次第で、ただ漠然とロマンティックな夢想を彼らの姿に重ねていたにすぎなかった。

実際に岩波文庫の『アベラールとエロイーズ（愛と修道の手紙）』を私が読んだのは、大学に入り、本格的にフランス文学を学び始めてしばらく経ってからのことだった。

事実は小説よりも奇なり。一読してそれまで臆気に思い描いていた夢想はもの見事に打ち砕かれた。とりわけアベラールから一友人に宛てて書かれた第一の書簡の内容は、実に驚愕すべきセンセイショナルなものだった。

さて、これからお話するそのアベラールとエロイーズについて、我が国ではごく一部の間でしか知られておらず、世界的にはほとんど知られていないところから、まずは彼らに関して簡単な説明をしておく必要があるだろう。そもそもアベラールとは何者だったのか。エロイーズとはどんな女性だったのか。

時は今から一〇〇〇年ほど遡る一一世紀。ヨーロッパ中世中頃の二〇七九年、フランスはナント近傍の町パレにピエール・アベラールは誕生した。ブルターニュの小貴族の家柄に属していた彼は、生来の天分と父親の熱心な教育とにより若くして優れた学才を顕し、当時碩学と言わ



れていたロスツェリヌス、シャンポールのギヨーム、ランのアンセルムらに学びつつも、たちまち彼らを凌駕していった。

特に普遍論に関する師ギヨームとの論争は有名で、アベラールは容赦なく執拗かつ徹底的にギヨームをやり込め、論破したと言われている。これにより彼の名声は天下にとどろき、その後ムランに、次いでコルベージュに学校を開くや、そこには彼の講義を聴こうとする学生が続々と集まったという。かくして彼は論理学者としての確固たる地位を築き上げることに成功した。

しかし、野心に燃えるアベラールはこれに満足することができなかった。論理学の分野ではもはや自らに比肩しうる論敵をもたなかったため、次に彼は神学を志すことにした。論理学者よりも神学者の方が高い地位に置かれているのを見につけ、それを苦々しく思い続けてきたためであった。

こうして神学者になることを決意したアベラールは、教授から再び学生に身を戻し、当時神学界の最高権威とされていたランのアンセルムの講義を聴くため、ランに赴いた。ところが、当のアンセル

ムは今やただ老練なだけの老人に過ぎなかった。「アンセルムは多数の聴衆の前にいるときこそ驚嘆すべき存在であったが、質疑者と対坐しては全く何者でもなかった。言葉の駆使は絶妙であったが、内容においては無価値であり、理論においては空虚であった」と後にアベラールはある友人宛てに書いた書簡（第一書簡）で述べている。もはや老師アンセルムについて学ぶべきものはないと悟ったアベラールは、次第に老師の講義から遠ざかっていった。

周囲にはそんな彼に偉大な師を侮蔑するのかと批難する者もいた。彼らは彼に師と同じことができるのかと挑発し、神学初心者の彼に、最も難解とされている『エゼキエル書』の注解をほどこすよう唆した。これを受けてただちに彼は『エゼキエル書』の研究に取り掛かった。そして、二回三回と講義をするうちに、最初は彼の卓越した解釈に驚嘆した聴講者は直に彼を称賛するようになっていった。評判は評判を呼び、ほどなくして彼は多くの支持者を得た。その支持者たちの勧めもあり、彼は『エゼキエル書』の解説を更続けるためにパリに戻ることにした。

パリに戻ったアベラールは、久しく前から彼に提供されることに決まっていた学校で、『エゼキエル書』の解説を完結すべくひたすら研究と講義に没頭して数年を過ごした。そして、「この講義は聴衆から非常に歓迎され、私はかつて哲学の教授において得たに劣らない神の恩寵を神学の教授においても得たものと人々から思われるに至った」と後にアベラールは述べている（第一書簡）。

かくてアベラールの名声はいよいよ高まり、その著作は多くの人々を魅了した。そして、彼の教えを乞うて全国から実に多くの学徒たちが彼の学校に押し寄せた。一説にはその数や五〇〇〇を超えたとも言われている。

時にパリの街にエロイーズという名のうら若き乙女がいた。見目麗しく博学で、十代半ばにして既にフランス全土でその才知は評判になっていたと言われている。哲学と聖經に通じ、好んでセネカ及び諸教父の著作に親しみ、ラテン語はもとより、ギリシア語、ヘブライ語をも能くしたという。

彼女はパリの司教座聖堂（ノートルダ

ム大聖堂）付参事会員（司教の相談役、補佐役を勤め、日々の祈祷・典礼等の聖務をも執り行う高位聖職者）であるフルベールの姪とされているが、実は彼女自身の身分についてはあまりよくわかっていない。さる貴族の私生児であったとか、あるいはまたフュベール自身の娘であったという説もあるようだが、真偽のほどは定かではない。

さて、この才色兼備のうら若き乙女が高名な学者アベラールと出会ったのは、アベラールが絶頂期を迎えた頃のことであった。彼の評判を聞きつけたフルベールが彼に姪の教育を願い出たことによる。つまり、アベラールに姪の家庭教師を依頼したというわけだ。アベラール三九歳、エロイーズ一七歳のときのことであった。

その年までひたすら学問一筋に生きてきたアベラールは、エロイーズを一目見るなり、彼女をいたく気に入ってしまった。これはまさに運命的な出会いと言わなければならない。「彼女は容貌も悪くはなく、学問の豊富にかけては最も優れていた。学問上の才能は女性にあつては稀であるだけに一層光って見え、全王国中その名を喧伝されていた。人をそそるあらゆる魅力こそなえ

ているのを見て、私は、彼女を愛によつ

て自分に結びつけようと思った」とアベ
ラールはエロイーズに出会った当初の印
象を述べている（第一書簡）。そう、アベ
ラールは最初からやる気満々だったわけ
だ。無理もない。三九の年まで女性とい
うものを識らずに独身を貫いてきた中年
男が、いきなり眩しいほどの輝きを放つ
うら若き乙女の生身の存在を身近に感じ
てしまったのだから。それまでずっと忘
れていた、あるいは抑えつけてきたオス
の本能が俄に沸々と身裡に滾ってきたと
しても無理からぬ話である。そして彼は
考えた。自分には絶大な名声があり、世
人に比べ年の割には若く見えるし、容姿
も人並み以上に優れているし、これで自
分に靡かない女はいないはずだと。仮に
相手が二二も年の離れた少女であつても
容易に落とせると信じて疑わなかった。

この目的のため、アベラールはフル
ベールに交渉して住み込みでエロイーズ
の教育に当れるようにしてもらふことに
した。そうすれば、何がしかの下宿料も
払うし、学校での講義の時間を除き、残
りの時間すべてを彼女の教育に当てるこ
ともできる……とまあ、そんな口実でフ

ルベールを説得したわけだ。

意外にもフルベールは簡単にこの申
し出を受け入れた。そればかりか、指導
する中で、もし彼女の怠慢に気づいた時
は、遠慮なく折檻してもよいとの許可さ
え与えた。まるで柔らかな牝羊を飢えた
狼に差し出すような無頓着さだった。ア
ベラールにしてみれば、まさに願ったり
叶ったり。これで思う存分うら若き乙女
の教育に邁進できると、アベラールは内
心密かにほくそ笑んだ。

で、その結果はどうなったか。話の展
開は容易に想像できよう。アベラールは
友人に宛てた書簡の中で次のように述べ
ている。

「我々はまず家を一にし、次いで心を一
にしたのである。教育という口実のもと
に我々は全く愛に没頭した。学問研究と
いう名目が愛に必要な離れた室を与えて
くれた。本は開かれてありながら学問に
関するよりは愛に関する言葉が多く交わ
され、説明よりは接吻が多くあった。私
の手はしばしば本よりは彼女の胸へ行っ
た。我々の目は文字の上を辿るよりは一
層多くお互いを見合った。嫌疑を避ける

ため、私は時に鞭を彼女に加えた。怒の鞭
でなしに情けの鞭を。この鞭はありとあら
ゆる香料よりも甘かった。結局我々は、愛
のすべての相を貪りつくした。愛の思い付
き得るすべての教奇を味い取った。これら
の喜びが私たちにとって新しければ新しい
ほど我々は熱心にこれに立ち向い、そして
それは容易に飽和状態に達することがな
かった……」

研究熱心なアベラールは、愛の行為にお
いてもその食欲さを如何なく発揮したもの
と思われる。まあ、ちよつとやり過ぎの観
もなくはない。しかし、彼の激越で一途な
性格を考えれば、それも宜（むべ）なるか
なという外はない。

一方でその研究熱心が仇となり、アベ
ラールの学校での講義はおろそかになつ
て、二人の仲が怪しいという噂が広まつて
いった。そして、その噂はやがてフルベ
ールの耳にも届くこととなった。これに激怒
したフルベールは二人の仲を割こうとし
た。

しかし、肉体を離されたことは却って二
人の精神の結合を強めた。思い通りになら
なくなつた愛はますます燃えた。

ほどなくしてエロイーズは自分が懐妊したことに気づいた。早速彼女はそこをアベラールに手紙で知らせ、今後のことを相談した。彼女が身籠ったことを叔父に知られたら、叔父がますます激昂することはわかりきっていた。そこで相談の結果、ひとまず彼女はアベラールの故郷ブルターニュに赴き、彼の妹の家に身を寄せることにした。

そしてしばらくアベラールの妹の家に身を隠していたエロイーズに、やがて男の子が生まれた。彼女はその子をアストララブ（アストララビウス）と名付けた。

さて、これでアベラールとエロイーズが結婚して平凡な家庭を築いたとすれば、話はハッピー・エンドとなり、けっして不幸な血生臭い事件は起こらなかったはずだった。しかし、アベラールもエロイーズも、両者ともに世俗的な家庭を営むには非凡すぎた。『中世の知識人』の著者ジャック・ルゴフによれば、一二世紀という時代は、「結婚を避けるという風潮が大いに広まった時代」だったそうで、「本性にかなった恋愛にかんする説を編み出した知識人グループにおいても、結婚は

名誉をけがすものでしかなかった」と考えられていたという。知識欲旺盛だったエロイーズがこうしたユマニスムの思想に染まっていたとしても不思議はない。事実、アベラールがフルベールの怒りを鎮めようと結婚を申し出た際、これに反対したのは他ならぬエロイーズ自身だった。理由は二つあった。まずはこの結婚が危険であること。次に結婚がアベラールの不名誉になるといふのがその理由だった。そしてまた、妻と呼ばれるよりは愛人と呼ばれる方が望ましいのだとさえ彼女は言うのだった。いつの時代にも進歩的を気取った跳ね返りはいるものだという批判はさておき、当時の知識人の間ではこうした考え方が支配的であったということは記憶に留めておいてよいだろう。

こうしたエロイーズの反対にもかかわらず、ひとまずフルベールの怒りを鎮めることに重きをおいたアベラールは、エロイーズをパリに連れ戻し、ある教会で、彼女の叔父及び双方の友人数人の出席のもとにひっそりと形ばかりの結婚の式を挙げた。式の後、二人はこっそりと別々に分かれ、その後はほんの時折人目を避けて逢瀬を重ねるのみであった。

ところが、一度は和解が成立したはずのアベラールとフルベールとの間に新たにまた亀裂が生じた。フルベールがアベラールとの間に交わした誓約を一方的に破り、二人の結婚を公にし始めたのだった。エロイーズはそんな叔父を非難し、その約束違反に抗議した。これに激昂したフルベールは姪をしばしば虐待するに至った。その事実を知ったアベラールは、エロイーズの身をパリ近郊のアルジャントウイユの修道女院に移した。但し、この時点ではまだ彼女は正式に修道女となったわけではなかったが、フルベール及びその一族はアベラールが厄介払いするため本来に彼女を修道女にしてしまったのだと考えた。彼らはひどく怒り、秘かにむごたらしい復讐をアベラールに対して企てた。

ある晩、アベラールは一人静かに学校の宿舍の離れた部屋に眠っていた。そこへ数人の賊が忍び込み、ベッドで眠り込んでいたアベラールに襲いかかった。賊はアベラールの口を封じ、手足を抑え込んで、まったく身動きができないようにした。そして賊の一人がナイフをちらつかせながら、いきなりアベラールの下腹部をまさぐり、むんずと逸物を掴んだかと思うと、素早くそ

れを根元から切り取った。アベラールの股間に激痛が走った。あつと言う間の出来事であった。あまりの驚愕に彼はしばし声も立てられなかった。

やつとのことアベラールが助けを求めたときには、賊はすでに逃走を図ろうとしていた。師の声を聞きつけて宿舎にいた学生たちが駆けつけ、事件を知るや、慌てて賊の後を追った。しかし、数人の賊のうち、捕えられたのは二人だけだった。そのうちの一人はいつもアベラールに仕えて身のまわりを世話していた召使だった。どうやら彼はフルベールに金で買収され、主人を裏切って賊の手引きをしたらしかった。

捕えられた二人は、直ちに眼と局部を切り取られた後、放免された。まさに「目には目を」という古代バビロニアの法典や旧約聖書に見られるような復讐律が適用されたわけである。公権力の介入しない私刑執行であることは言うまでもない。

翌朝、事件を知った全市の人々がアベラールの宿舎の前を集まった。人々は驚き、歎き、悲しんだ。ある者は呻吟し、またある者は叫び声を発し、宿舎の前は大変な騒ぎとなった。その騒ぎはアベラー

ルを当惑させ、苦しめ、いたく羞恥心を掻き立てた。種々の思いが彼の胸中を慌ただしく過っていった。思えば、それまで実に大きな名譽を享受してきたものだった。それが一瞬にしていとも簡単に墮ちてしまったことに彼は思い至った。

この事件の後、アベラールはまだ傷も癒えぬうちにサン・ドゥニの修道院に隠れ、修道士となった。自ら述べている通り、「宗教的要求」ではなくて「困惑と恥辱感」から逃れるためであった。その少し前に、エロイーズはアベラールに命じられるままアールジャントウイユの修道女院で修道の誓願を立て、正式に修道女になっていた。こうして、二人は時を擱かずしてそれぞれ修道の道を歩むことになったわけである。以後、二人の関係は完全に断たれてしまった。

それから一三年の歳月が過ぎたある日、偶然にもエロイーズはアベラールが姓名不詳の一友人に宛てて書いた手紙(第一書簡)を手にするようになる。それは彼が友人を慰めるために書いた自伝ともいふべきもので、そこには彼の身に降りかかった様々な災難が書き記されていた。彼女は貪るようにしてそれを読んだ。読んでいくうちに、

彼女の裡に燻っていた在りし日の想いが生々しく甦ってきた。そうして掻き立てられた情念の焰は、時を経ず更に激しく煽り立てられた。手紙はサン・ジルダの修道院から発せられたものだった。これを確認するや、矢も楯もたまらず彼女はかつての恋人に手紙を書いて送った。これが一一三二年のことと推定される。この時、アベラール五三歳、エロイーズは三一歳になっていた。

こうして手紙による二人の交流が再開され、その遣り取りは以後数年に亘って続けられた。最初のうちこそエロイーズは、抑えた筆致ながらも、時に情熱の迸りを思わず吐露せずにはいられなかった(第二書簡及び第四書簡)が、以後は淡々と宗教上の教示を求めたり、修道生活上の助言を仰いだりするのみであった。一方アベラールは、彼女から発せられる種々の問いや要望に対し、ひたすら誠実に懇切丁寧に答えようと努めているようだった。その表現は抑制的で、冷めている。否、寧ろ冷淡であるとさえ言えよう。もう彼も若くはなかった。往時の思い上がりはすでになく、かつて犯した自らの過ちをすっかり悔いる気持ちにもなっていた。

あの恥ずべき事件の後、いくつもの艱難
辛苦を経るうちに、彼はいつしか敬虔な
キリストの僕の一人名となっていたのだっ
た。

そんなかつての恋人の変節にもかかわ
らず、エロイズは相変わらず彼を師と
仰ぎ、また恋人として一途に慕い続けた。
修道女となり神に仕える身にはなっても、
彼女のその気持ちは終生変わることがな
かった。これを以て不謹慎とは言うなか
れ。幼い頃より修道院で養育され教育を
受けた彼女がこの俗世間に身を置いたの
は、僅か三年ほどの短い期間でしかなか
つたのだ。この間にアベラールと出会い、
恋に落ち、めくるめく官能の世界に溺れ
た。やがて子どもができ、形ばかりの結
婚をしたものの、叔父の怒りを買ひ、虐
待の憂き目に遭って再び修道院に入らね
ばならなくなった。この僅か三年間の歎
びと哀しみが彼女の人生のすべてだった。
したがって、アベラールとの愛の思い出
は彼女の唯一の財産であったと言つてよ
いだろう。それを守り続けようとした彼
女の一途さを一体誰が咎めることができ
ようか。

もちろん、この二人の書簡集が後世ま

で広く読み継がれてきたのも、彼女の率直
で一途な愛情の表白あつたことだと言え
よう。もしこうした表現がなかったとすれ
ば、アベラールのセンセイショナルな自伝
とも言うべき第一書簡は別として、この書
簡集は単なる退屈な教理問答集になつてい
たはずである。また物語性もそこからは生
まれようもなかったであろう。

更にもう少し付け加えるならば、このき
わどい物語を通俗さから救つているのは、
やはり彼女の知性が随所に窺われるその表
現様式によるところが大きいように思われ
る。

こうした情と知の融合した修辭法こそ
が、一見退屈なこの書簡集をロマンスに昇
華変容させ、薄幸な女主人公エロイズの
愛おしさを読者に印象つけているのではな
いだろうか。実際、後世の読者もまたこの
書簡集を一個の物語として受容してきたこ
とは疑い得ない。それは後に書簡集前半(第
二書簡から第五書簡までの所謂「愛の書
簡」)を独立させたかたちで、ラテン語原
文に大幅な改変を加えた書簡体小説がいく
つも作られたことから窺い知れよう。

ところで、ここまで私は故意にアベラー

ルとエロイズの間にできた子アストラ
ラブに関する言及を避けてきたが、彼は
その後どうなったのであろうか? 畠中
尚志訳の岩波文庫版の註によれば、「――

この子供については詳しいことは知られ
ていないが、とにかく無事成人したこと
は確かである。何故ならエロイズは、
アベラールの死後、クリニユアの修道院
長ピエールにたいし、このアストララブ
のため何らかの聖職を世話してくれるよ
うに手紙で頼んでいるからである」と書
かれている。アベラールとの関係性にお
いてのみエロイズという女性を捉える
と、実の子に対する冷淡さは意外に思わ
れるかもしれない。あるいは興醒めした
と感じる方もおられるに違いない。これ
はまあ子供やら家族やらに対する考え方
が現代の我々とは根本的に違うのだと言
う外はない。

とりわけ近世以前のヨーロッパにおけ
る子供に対する考え方は、ひどく突き放
したものだ。例えば、これは極端な
例かもしれないが、『人間不平等起源論』
や『社会契約論』を著したルソーは、一
七四五年に宿屋の下女テレーズと関係し、
以来十年間に五人の子を孕ませ、生まれ

るそばから次々と養育院に捨てたと言われている。貧しさのせいもあったように思われるが、当時、新生児の三分の一は捨てられていたというから、ルソーもその習慣に従っただけのことかもしれない。罪の意識は、おそらく彼自身にもなかったのではないか。つまりは、そういう時代だったのである。

さて、再びアベラールとエロイーズの話に戻ろう。彼らの往復書簡集は、アベラールの信仰告白である第十二書簡をもって終わっている。この書簡がいつ頃書かれたかははっきりしていない。第一書簡の書かれた一三二二年、アベラールはサン・ジルダの修道院に身を置いていたが、それからほどなくしてこの修道院を去っており、その後数年間彼の消息は不明となっている。

次にアベラールがクローズ・アップされるのは一一四〇年のサンスの公会議においてであった。彼にとってはこれが最後の論戦の舞台となったわけであるが、論敵クレルヴォーの聖ベルナルの陰謀により、彼はその場で異端として断罪されてしまう。更にはその罪を教皇に認め

させ、彼の著作を焼却させるべく、書状がベルナルに忠実な枢機卿に宛てて送られた。これは即ち彼の破門に繋がる重大な事態であった。かくなる上は会議の権限に異議を申し立て、教皇に上訴するしか彼には道が残されていなかった。

彼は直ちにローマに向けて旅立った。しかし、長旅の疲れは老いた身体には相応に応えた。途中、クリュニーの修道院に立ち寄ったときには、既に彼は病を得て憔悴しきっていた。クリュニーの修道院長ピエールは彼を懇ろに迎え入れ、ベルナルとの和解の労をとり、ローマに彼の破門を取り消させた。そして彼の身を案じて、シャロン・シュル・ソヌのサン・マルセル修道院にその身柄を預けた。アベラールはそこでしばらく静養に努め、祈りと勉学の穏やかな日々を過ごした。しかし、病は癒えることなく進行し、彼は遂にその地で最期のときを迎えた。一一四二年四月二一日のことだった。ピエール・アベラール、享年六三歳。思えば凄絶な人生であった。その後クリュニーの修道院長ピエールは、この上なく細やかな心遣いのもとに、アベラールの遺骸を当時パラクレイ修道

院長となっていたエロイーズに引き渡した。エロイーズは、アベラールの生前の希望に従い、その遺骸をパラクレイの修道院内に葬った。しかし、これでも心の安まらなかつたエロイーズは、クリュニーの尊者ピエールに頼んでアベラールの赦免状を書いてもらい、これを彼の墓標に懸けた。

こうしてアベラールの墓を守りつつ、エロイーズは更に生き延びること二二年、奇しくもアベラールと同じ六三歳でその生涯を閉じた。彼女がこの世を去るや、人々はその遺骸をアベラールの棺の中に合葬した。後に改葬されて、パリのペール・ラシェーズ墓地に比翼塚が建てられた。一八一七年のことである。以来二人はここで仲睦まじく安らかに眠っている。

(二〇一六年一〇月一日)

※参考文献

『アベラールとエロイーズ（愛と修道の手紙）』 畠中尚志訳 岩波文庫

『中世の知識人』 ジャック・ルゴフ著 柏木英彦・三上朝造訳 岩波新書